

平成二十六年六月十日発行
皇學館論叢第四十七卷第三号 抜刷

研究ノ一ト

丹羽文雄「菩提樹」にみる宗教的態度

——宗珠と館の宗教談義をめぐって——

河合重好

丹羽文雄「菩提樹」にみる宗教的態度

——宗珠と館の宗教談義をめぐって——

河合 重好

□ 要 旨

作家丹羽文雄の作品には、「浄土真宗もの」といわれる六作品がある。これらの作品は、いずれも、作者が熟年になって発表されたものであり、それまでの宗教色のない膨大な作品群に比べ、作風の大きな転向がみられ、その後の宗祖をモデルとした「親鸞」や「蓮如」といった大作を完成させるに至った作家生活の生涯において、これら六作品は、初期における作者の宗教に対する態度を知る上で、重要な位置を占めるものと考えられる。ここでは、「青麥」に次ぐ、第二作である「菩提樹」を対象に、この時期における作者の心的背景や信心に対する立場が、どのようなも

のであったかについて考察を試みた。その結果、作者は浄土真宗への接近に深い関心を抱いているが、本人自身は、唯物論者であったことが、作品中の言説から読み取ることができると

□ キーワード

丹羽文雄・浄土真宗・宗教的真理・他力本願・作者の宗教に対する態度

はじめに

宗教小説の第一人者といわれる丹羽文雄(一九〇四—二〇〇五)の作品には、作者の熟年期に発表された「浄土真宗もの」といわれる六作品があり、その内訳は、発表年代順に、「青麥」(昭和二八年、文芸春秋新社)、「菩提樹」(昭和三〇年、週刊読売)、「有情」(昭和三七年、新潮)、「一路」(昭和三七年、群像)、「肉親賦」(昭和四四年、群像)、「無慚無愧」(昭和四五年、文学界)となっている。いずれの作品も、寺院を舞台に男女の愛欲を主題とした倫理的な罪やその背景に対し、親鸞の「罪の救済」についての宗教的教義(浄土真宗の根本思想である他力本願)が作品の随所に引用され、宗教色の強いものとなっている。

一方、作者の文筆履歴を辿ってみると、作者は、これらの作品を発表する以前に、二〇代から始まる長い文筆生活を通じて、「生母もの」(「秋」)、「鮎」(「贅肉」など)、「マダムもの」(「海面」)、「愛欲の位置」(「甲羅類」など)といった自伝的作品を手始めに、比類のない数多くの作品を残しているが、これらは、いずれも、親鸞思想とは無縁の宗教色のないものである。しかし、熟年期に至り、初めて、前記六作品にみられる宗教小説に開眼していった経緯をもっている。ここに、宗教を志向する作家生

丹羽文雄「菩提樹」にみる宗教的態度(河合)

活への大転向があったことが窺われる。この点に関し、中野恵海は、文芸講演会(昭和二八年、「青麥」発表と同年)での作者の言説を次のように紹介している。⁽²⁾

私は宗教というものは決して今は軽蔑はいたしておりません。現実だけで小説はたくさんだと思っていた。私の今までの人生観、つまり私の小説道というものが行き詰ってそこで血路を開いてくれたのが、目に見えない世界です。この目に見えない世界というものが目の見える世界と同様に人間に尊ばれているということがやっと気がついた。

この言説においては、どういう挫折が、その転機になったかまでは言及されていないが、形而上学的な信仰の世界への接近が述べられている。その背景には、作者自身の生い立ちにおいて、宗教が身近な存在であったことが深く関与しているものと思われる。また、筆者なりに、作品の発表年代と作者の年齢に着目してみると、これら六作品は、第一作である、昭和二八年、作者四九歳の作品である「青麥」から始まっており、決して若くない中年を迎えて、残された余生に思いを馳せ、過去を回想する機会があったのではなからうか。その結果、親鸞の正像末和讃(愚禿悲嘆述懐)の主旨である「人間は、罪を犯さずに生きられない」といった思想に共鳴し、晩年に強まる自責の念といった思いが宗教への接近を促したのではなからうかと考えら

れる。

これら六作品は、浄土真宗の末寺（真宗高田派崇顕寺、四日市市）に生まれながら、宗教は文学の邪魔になるとの判断から、浄土真宗の宗祖である親鸞を否定し、背教者として二八歳で僧侶生活を離脱し、文学の道を選択した丹羽文雄が、後年になって宗教に回帰し、その後の「親鸞」（昭和四〇～四四年、サンケイ新聞）や「蓮如」（昭和四六～五六年、中央公論）といった大作を完成させるに至った作家生活の生涯において、初期における作者の宗教に対する態度を知る上での一里塚として、重要な位置を占めるものと考えられる。

本稿は、「青麥」の二年後に発表された第二作である「菩提樹」を対象に、この時期における作者の心的背景や信心に対する立場が、どのようなものであったかについて考察を試みたものである。

この点に関し、作者自身は、「親鸞」のあとがきで、「私は歴史家ではない。宗教学者でもない。人間性を追究することを仕事の間として文学者にすぎない」と述べている。このことから、作者がどの程度、信仰の扉を開いていたかは不明であるが、宗教小説を展開するにあたっては、相応の宗教に関する造詣があったことは疑う余地はないものと考ええる。

特に、この作品の特徴は、他の五作品に比べ、最も宗教的教

義の引用が多いだけでなく、他の作品には見られない特異な描写として、僧侶の宗珠と檀家の一人である館との宗教談義が文脈上、最も大きなウエイトを占めていることから、本稿においても、この部分に焦点を当てて、作者の宗教に対する態度を論じてみたい。

この作品は、前作「青麥」に比べ、かなり長編であり、昭和初期の時代を舞台に、次の三点が主な筋書きとなっている。

(一) 気の弱い宗珠（養子）が、祖母のみね代の性的欲求に悩む姿

(二) 宗珠と檀家の一人である館（共産黨員）との自力、他力に関するかなり長い宗教談義

(三) 宗珠と実業家の妾である小宮山朝子との間の道ならぬ恋に苦しむ二人

この中で、筆者が(二)の宗教談義を特に着目したのは、作者丹羽文雄のこの時期における宗教に対する姿勢が登場人物の対話の中に表象されており、次第に宗教小説に立ち向かう過程での心の軌跡を文脈から読み取ることができるものと判断したためである。

一 「作者の宗教に対する態度」への考察

本稿で主題としてとりあげる宗珠と館との宗教談義を通して、両者の宗教的信条が描写されている部分を抽出、要約し、作者の宗教に対する姿勢を考察すると次のとおりである。

(一) 宗教批判(「目は目で見えぬ」の章)

檀家の一人である館要助(共産黨員、製陶会社勤め、五〇歳)が宗珠のところへ「教行信証」(親鸞の全思想を表わしたものの、「教行の巻、信証の巻、真仏土の巻、化身土の巻」の続編(信証の巻)を借りにくる。そして、宗珠は、「唯物思想にこりかたまっている館のどこに唯心的な仏教をうけ入れる余地があるのだろうか」と思う。

① 二人の対話の中で、館は自分の宗教的信条を、吐露する。一般にマルクス主義は、宗教を否定しているが、自分は刑務所に入っている間に、「宗教的真理」なるものを信じるようになった。

「神や仏は、よかれ悪しかれ、人間の意識の産物ですね」「人間が神や仏を自分に似せてつくったものですね。私は、神がすべてのものを造ったなんて神秘説は信じてい

丹羽文雄「菩提樹」にみる宗教的態度(河合)

ません」「私は心というものを、意識と精神を、あくまで物質の所産として信じます。私はあくまで唯物論者ですよ」「宗教的真理というものは、意識に関する問題です。その意識は、人間の肉体を構成している物質の機能にはかならないと信じています」「私が宗教的真理の問題にするところは、意識そのものを意識することです。心に心を映すことです。親鸞の教えは、しばらく措いてください。いきなり親鸞の教えを云々されたところで、信じられる人々はいいが、信じられない人間には、まず宗教的真理は何を問題にするのか、宗教的真理は如何にして把握されるかというところから出発して納得するのではなくれば、いかに深遠な、ありがたい親鸞の教義も無駄ですからね」などと館は言う。

② 館は話を続ける。「宗教的真理は、意識そのものを意識することを問題にするのだと考えます。ですから、当然普通の意識作用とはちがいます。普通の意識作用では計量することは出来ません。普通の意識作用の外にあるものです。それが根本的な特色です。神や仏に祈る場合、私たちが普通の意識作用で考えるから、矛盾が生じたり、疑いが生じるのです。私は新興宗教を信じません。現世利益など当てに出来ません。宗教とは、そ

う性質のものではないからです。宗教的真理は科学的真理とはちがいます。相容れないものです。扱う対象がちがつているものです。一方は内界の心を問題とするが、他方は外界の物を問題にするのです。

③ 館は、さらに話を続ける。

普通の知識は、外物が心に映ることによって生じるものである。その時、外物は客であつて、心は主である。主客が相對することが条件である。どこまでいつてもこの關係は相對的である。が、宗教的な知識は、心が心を見ることによつて初めて得られるものである。このことは、主客の對立を超越している。その意味において絶対的であると館は説く。

「あらゆる世間的知識が、信仰を得るためには却つて邪魔になるといふのは、この道理だと思ひます。親鸞は、宗教的真理と科学的真理を對立させたり、意識するものが自己を意識するとか、意識の自己意識などということばは使つていません。もつとやさしいことばで教えています。ところがそのやさしいことばは使ひが、今の人間には却つてむづかしいのです。納得できないのです。カント流の哲學者のいうように、現象と原理的に異なるものとか、原理的に現象とは別個の領域に屬するものと

か、知識によつては到底到達することの出来ない、ただ信仰によつてのみ闡明され得るところの彼岸の領域に屬するものという風に説明しなければ納得してくれませぬ」そう言つて館は、自分の考え方がマルクス主義者に似合わない形而上學に落ちこんでいると疑われるだろうと前置きして「しかし科学的真理を把握するのも、宗教的真理を把握するのも、同じに人間の意識作用の認識ですからね」「その人間の意識作用は、人間という高等動物の有機的組織の中に包含されているところの、高度に發達した脳髓などの機能にはかならない」胸のすくような斷定である。「だから私は、宗教的真理をみとめるからと言つて、神秘的な世界を要求しません。キリストの再臨だの、西方極樂淨土など、當てにしません」と自説を述べる。

一方、作者には、作中の館と違ひ、共産黨員を對象とした投獄の経験はないが、館を投獄の過去を持つ共産黨員としての設定していることは、作品の時代背景となつてゐる昭和初期における治安維持法によるプロレタリア文學への思想彈圧が盛んであつた社会情勢をよく反映していることが窺われる。因みに、作者（一九〇四—二〇〇五）と同時代の小林多喜二（一九〇三—一九三三）の拷問によると考えられる獄中死や亀井勝一郎

(一九〇七—一九六六)の二年半の投獄ののち共産党員から転向など、身近な出来事が作者の意識にあつたものと思われる。

なお、この時代の文学界は、プロレタリア文学運動と、新感覺派を中心とする芸術派の文学の対立を中心として展開されていた。

プロレタリア文学は、思想性をはっきり打ち出し、社会の革新という具体的な目的を持って、在来の個人主義的な文学を否定した。これに対して、芸術派は前衛芸術に示唆され、文学手法の革新を旨とし、伝統文学の否定を試みた。しかし、プロレタリア文学運動も組織の解体によって崩壊し、新感覺派も表現形式の尊重から人間性の喪失と現実の解体によって衰退して行く昭和十年代には、プロレタリア文学からの転向文学の出現や既成作家の活躍、昭和作家の登場などによって、文芸復興の様相を呈してくる。しかし、まもなくファッショズムの台頭によって、言論の統制が厳しくなり、国策に沿った文学が要請されるようになって、文学の空白時代が訪れた。

一方、丹羽文雄の作風は、自伝的小説として定評があるように、これら六作品も例外ではなく、また、右に記した私小説批判から端を発した大正末期から昭和初期の文学界の大きな二大潮流の中にあつても、「生母もの」(「秋」大正一五年、「鮎」昭和七年、「贅肉」昭和九年など)、「マダムもの」(「海面」昭和

丹羽文雄「菩提樹」にみる宗教的態度(河合)

九年、「甲羅類」昭和九年など)といった作品により、伝統的な私小説を継承しており、作家としては少数派に属しており、思想弾圧とは無縁の立場を保持していたものと考えられる。

さて、前記の①、②、③の三つの段落にみられるように、作者は、館という人間の人物像を描いているが、筆者は、ここに、宗教小説への転向にあたる作者の宗教に対する率直な心境を館に重ね合わせて、語っているものとして論を進める。

先ず、第一段落で、注目されることは、館の会話にみられる「人間が神や仏を自分に似せてつくつたものですね。私は、神がすべてのものを造つたなんて神秘説は信じていません」という言説は、明らかにキリスト教の教義を否定しており、また、「私は心というものを、意識と精神を、あくまで物質の所産として信じます。私はあくまで唯物論者ですよ」と明言しており、さらに、宗教的真理なるものが何であるかがわからなければ、いかに深遠な、ありがたい親鸞思想も無駄であると述べ、入信への困難性を語っている。ここで、特に入信のための前提条件として、宗教的真理に対する理解の必要が強調されているが、具体的にどのような修業の結果得られるものか示されておらず、難解である。

また、第二段落では、館は、「神や仏に祈る場合、私たちが普通の意識作用で考えるから、矛盾が生じたり、疑いが生じる

のです。私は新興宗教を信じません。現世利益など当てに出来ません」と述べ、現世往生を説く浄土真宗を含め、宗教に対して否定的な見解を示している。

さらに、第三段落において、館は、「人間の意識作用は、高度に発達した脳髓（物質）などの機能にはかならない」と象徴的な唯物思想を披露し、また、「キリストの再臨だの、西方極楽浄土など、当てにしません」と、無神論を述べている。

結論として、作者は、物質の实在を認めず、外観は主観の観念であるとする唯心的な仏教思想に目覚めつつも、本質的には、物質とは別物の靈魂や精神は実在せず、意識は高度に組織された物質である脳髓の所産であるとする唯物論の支持者であったものと思われる。

(二) 救い（「目は目で見えぬ」の章）

次に宗教にとって最も重要なテーマである「救い」について、二人の問答形式の対話を通して、作者が救いをどのよう
にみていたかを考えてみたい。

① 「館さんは、安心立命を、救いをお考えになつて
いるのでしょうか」「むろんですよ。刑務所の中で、孤独地獄に陥ちて、気が狂うのではないかと思ひました。小さな時からお念仏には慣れていましたが、信仰心があつた

わけではありません。その時は、ひとりでに南無阿弥陀仏が口から出ました。その瞬間です、自分に仏性があつたと気がつきました。意識の自己意識です」

「人間は救われるものと思ひますか」

「それを、ご院さんにおたずねしたいのです」

「私にも判りません」

そう答えた時、宗珠は耳もとで何ものかが鳴り出すのを感じた。情慾と物慾と背徳が音に換わつて、耳のそばで鳴りはじめたようである。その音は、永久に絶えないようであつた。傷をうけたけどものが、広野で泣き叫んでいるようにも聞こえる。海の音にも似ていた。赦されざるものである。呪われたものである。宗珠の身は、業苦の海に没している。

「誰に人間の救いの保証が出来ましょう」その声は、淋しかった。館要助の顔に、感動の色があらわれた。

「正直なお方だ、ご院さんは……」

「彼方から来るものに一切を委ねるがよいということが判つていながら、私はまだまだ捨身にはなりきれません。私には聖人の教えに対して、心を勞することが足りないのです」

② 絶対無条件の他力の救いを信じるということは、ある

がままな自分の欲求と、あるがままな自力の分別に従ってそういう生き方をする自分を、そういう生き方しか出来ない自分を、そっくり如来のはからいにあずけつ放しにするということですね」

「如来の救いは、私達がそれを信じようと、信じまいと、すでにとっくの昔に出来上っているのです。私達はただ、すでに救われているのだという事実が気がつきさえすればよいと、親鸞は説いています」

「大へん簡単な教えのようですが、考えようによつてはむずかしいことですね。如来の大悲に抱きとられている自分に気がつきさえすればよいと言われますが、そうした自分に気がつくということが、なかなかむずかしい問題です」

「ありのままな自然、人間的な自然のままに生きていくそのことが、如来の指図で動いているのだという自覚です。仏と一体になって生きていくという自覚です。自覚もまた、有力な自力の一つになりますが、そうすれば、まちがいのない生き方が出来る、安心しきった生き方が出来るという信頼感ですね。理屈はやさしいものと思いません。が、そのところの飛躍が私にはむづかしいのです。」

丹羽文雄「菩提樹」にみる宗教的態度（河合）

この点に関連し、作者が後年になり、子供の頃（八歳）に一度を受けた高田の専修寺を四二年ぶりに訪れ、本堂に座つたときの作者の心境を「現代仏教講座第四卷」（昭和三〇・角川書店）「私と仏教」から中野は、次のように紹介している。⁽⁵⁾

私は誇るべき何ものもない。いまこうして仏と対座しているが、五〇年にわたる自分の生涯は、いかにも中途半端なものであるという考えが強かった。仏の前では、強がりもできない。うぬぼれの底を見すかされてしまう。なにこともかくしうがなかった。私は親鸞の言行録を読んでいる。頭で理解している。心を打たれている。そのくせ、理解してきたことのどれだけを私が実行しているだろうか。何も実行していないと言つてもよいのである。煩惱にとらえられて、わたしは不信をはたらいている。親鸞は決してむづかしいことを私たちに命じなかった。そのためことさらやさしいことを、くりかえし教えているのだが、そのやさしいことが、私には実行できない。無慚無愧の極悪人という自覚は、いうはやさしいがとても実行の出来ることではない。

以上、最初の①の段落において、作者の宗教に対する態度を知る上で、筆者が最も注目するのは、「人間は救われるものと思いませんか」という宗珠の問いに対して、「それを、ご院さん

におたずねしたいのです」と逆に尋ねられ、宗珠は「私にも判りません」、「誰に人間の救いの保証が出来ましょう」また、②の段落においては、浄土真宗の根本思想である他力本願についても、如来の救いはすでに出来上っており、その事実が気がつきさえすればよいという親鸞の教えに対しても、

「彼方から来るものに一切を委ねるがよいということ」が判っていないながら、私はまだまだ捨身にはなりきれません。私には聖人の教えに対して、心を勞することが足りないのです」

と発言しており、自らの無能力感を自白している。

一方、前記の「宗教批判」の文脈では、「現世利益」や「西方極楽浄土」を否定しているのに対して、ここでは、「救い」そのものは、否定しておらず、修業が足りないから、体感できないという立場になっており、文脈上の曲折（心の揺れ）が見受けられる。

二 「現代作家論」での丹羽文雄に対する亀井勝一郎の評

作家丹羽文雄と同時代に生き、交流のあった亀井は、作者の人物評の中で、浄土真宗の救いに関し、次のような独自の見解を述べている。⁽⁶⁾

どんな宗教も救いを説く。人間はまた何らかの意味で夫々に救われたい。しかし「救い」こそ最も深い惑はしてはないか。迷妄ではないか。我々の抱くあらゆる救済観念を破壊してみようというのが親鸞の教の根本なのである。

(中略)

「救い」の問題はどうなるのか。煩惱具足の凡夫といふ自覚は、何よりもまず「救い」の拒否となって現はれなければならぬものである。甘えているかぎり、どこかに「救い」はあつたらう。しかし、親鸞の教の最も重要な点は、人間として考へ計量しうるかぎりの一切の救済観念を破壊したことだ。人間の考へうる「救い」とは虚妄ではないか。自力に対して他力といったのはこの点である。「悟り」もむしろ否定される。宗教といえは、すぐ「救い」と「悟り」という言葉が浮かんでくるのは常識で、それだけの理由もあるが、真宗は最もよくこれに反撥した宗教である。

と述べ、どうぞお助けくださいといったような自力から発する祈りではなく、私たちは弥陀の誓いによって浄土に迎えられるのであって、念仏行者は、もはや善いとも悪いとも考える必要はなく、人間の分別が関与するものではないといった浄土真宗特有の宗教観を強調している。また、亀井は、別著において、次のように述べている。⁽⁷⁾

様々な努めても迷妄はやまず、或る刹那は高い心に達してもまたたく間に転落する人間の悲しさ、そのどん底において、はじめて祈りの世界をひらこうとしたのは親鸞であらう。もし救いが目にみえて与えられるものであり、更生が直ちに遂げられるものであるならば、我々は自分の能力だけを信じればよい。乃至は設備をよくすればよい。

だが実際はそういうことは不可能なのだ。我も人も救いを口にし更生を言うけれど、悲しむべきことには、我々はひとりの人間すら自分の力で救うことは出来ない。窮極のところまで責任をもつことは出来ない。同情心から発した慈善行為が魂のまことの救いでないことは云うまでもなからう。

(中略)

内面的にいえば人間は幾度も転落する。その生涯は果つることのない漂泊である。もう駄目だと思う。救いはない、更生もない。何をやっても自分の墮落はとどまるところがない、この絶望と敗北の窮極に、おそらく唯一つの道を求めたのが親鸞であらう。この救いのない人生の痛苦を、そのまま背負い、罪は罪としてひきうけて、まさにそういう凡夫の姿で、祈りの世界に入ろうとしたのだ。

「いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定

丹羽文雄「菩提樹」にみる宗教的態度(河合)

すみかぞかし。」そこに一切を委ねつくす境地がある。救いがあるかないかわからない。あるとも言へない、ないとも言へない。それは人間の計量し打算すべきことではないのだ。黙して人生の苦杯をうけ、内奥の罪禍故にただ祈るのみである。たすかる見こみがないからこそ祈りの世界はある。救いの有無を問はないところにうちたてられた信仰のみが真実の信仰なのではないだろうか。

(中略)

これが祈りなのだ。かくあつて欲しいと要求するのが祈りなのではない。どうあつてもいいと神仏の御心のままに委ねつくす。虚心こそ最も美しい祈りなのである。無条件の帰依である。

と述べており「悟り」や「救い」を完全否定した「祈り」の信仰を説いている。しかも、その「祈り」とは、通常の神社、仏閣への祈願とは、まったく異なるものとしており、一切の自力を否定した浄土真宗特有の宗教観を説いている。

しかし、筆者は、ここで述べられた「悟り」や「救い」を完全否定した「祈り」だけを頼る信仰は、はたして浄土真宗信仰の真相を物語るものなのか、亀井自身の独自の解釈ではないのだろうか、救いを一切期待できない宗教というものに魅力があるのか、現在、浄土真宗が日本最大の宗派として、大衆に支持

されている理由は何かについて、もつと説明が必要なのではないかと考える。

この点、浄土真宗ものといわれる六作品の内、最後の第六作（昭和四五年、作者六六歳）である「無慚無愧」に着目してみると、作者は、徹底的に内心の罪を自覚し、理性の枠を超えて、念仏を称えれば救われると説いており、救いについて肯定的な文脈となっており、亀井とは大きな隔たりのあることが窺われる。このように、同じ親鸞思想でありながら、両者で大きな相違があるのは何故か。一方は文学者、他方は評論家であり、いずれも宗教家ではないが、「救い」に対する難解性を示しているものと判断される。

おわりに

以上、「菩提樹」で描写されている二人の宗教談義の言説から、宗教小説創生期の作者丹羽文雄の宗教に対する態度がどのようなものであったかを知ることができる。

すなわち、作者は、この時期、作品の随所の描写に、宗教全体に否定的な姿勢を示しており、先に述べた館の言説にもみられるように、宗教への新しい目覚めを自覚しながらも、かなり強い唯物論者であったことがわかる。

特に、この作品は、他の五作品に比べ、最も宗教的教義の引用が多く（巻末の表参照）、浄土真宗の根本経典である「教行信証」をはじめ、七つの教義が展開されており、作者は親鸞思想に対して、かなり強い思い入れをもって臨んだことが窺われるが、結論的には、入信の境地には至っておらず、信仰の世界に対しては、客観的立場にあつたことがわかる。また、時代の流れに左右されず、保守的な作家であつたこともわかる。

（注）

（1）武田友寿は、「宗教の救済と文学の救済」（国文学解 積と鑑賞』三九巻八号 一九七四年七月 四四〜五〇頁）の中で、次のように述べている。

丹羽文雄はもつとも切実に宗教的テーマを追究してきた作家である。「一路」三部作といわれる「青麥」「菩提樹」「一路」はそのテーマを極限まで深化し展開したものであつたろう。これに「無慚無愧」を加えた四作は、戦後日本文学に現代文学のなかでももつともすぐれた宗教小説であるといつてよいであろう。

（2）中野恵海「丹羽文雄と親鸞（上）」——小説「青麥」以前——（相愛女子短期大学研究論集』三巻二号 一九五六年八月）一〇三頁。

(3) 守随憲治・真下三郎 監修『新編 日本文学史』(第一学習社、昭和四四年 一五三頁)では、次のように記述している。

プロレタリア文学は、大正末期から昭和初期にわたって芸術派の文学と対立しながら、芸術派とは別の視点から既成文壇の否定を旨として、大正三年(一九一四)第一次世界大戦以降の労働者と資本家との対立の激化を背景として展開された。

(4) 守随憲治・真下三郎 監修『新編 日本文学史』(第一学習社、昭和四四年 一五五頁)では、次のように記述している。

「昭和初期の特徴は革命の文学を標榜したプロレタリア文学と、私小説、心境小説を中心とした文壇内の革新を旨とした新感覚派をはじめとする新興芸術派、新心理主義などの芸術派の文学が対立して活動した点とである。(中略)第一次世界大戦、大震災後の社会の混乱を反映して、欧州の前衛的な芸術の主張をとり入れ、従来の写実主義の方法を否定し、擬人法、比喩などの文学技巧の革新を旨とし、知的に再構成された感覚によって現実をとらえた。

また、代表作家として、横光利一、川端康成などを挙げ丹羽文雄「菩提樹」にみる宗教的態度(河合)

ている。

(5) 中野恵海「丹羽文雄と親鸞(上)」―小説「青麥」以前―(『相愛女子短期大学研究論集』三卷三号 一九五六年八月) 一〇二頁。

(6) 『亀井勝一郎全集』第五卷「現代作家論」講談社 昭和四七年九月 一八二頁・一九〇頁。

(7) 『亀井勝一郎全集』第六卷「罪と救ひ」講談社 昭和四六年七月 二二三―二三四頁・二三六頁。

【付記】本稿で扱った作品は、昭和四九年(一九七四)発行の『丹羽文雄文学全集第一巻』に依拠した。

(かわい しげよし) 皇學館大学大学院博士後期課程